

単元の指導の実際①

ア まち探検で見付けたことを伝えよう【7 時目】

グループでの1回目のまち探検では、「とっても素敵」「とっても不思議」「頑張っている人」等の視点で探検を行っている。児童の実態としては、そこにある「もの」には気付くことができているが、なかなか「ひと」に気付き、地域の人々の思いや願いにまで迫ることがなかなかできないのが実情である。そこで、まち探検を行う際には、「出会った人の名前を聞いて、仲良くなってくる」ことを共通のミッションとして投げかけている。事前に児童が行きたいと計画している場所については、活動の意図を伝えること、できるだけお店や施設を訪ねて、協力依頼をすることで学校との関係性を築くことも心掛けてきた。

まち探検で見付けたものをクラスで共有する前に、児童はカードに見付けた「もの・こと・ひと」について整理をしている。そのカードで「ひと」に着目できている児童を皆の前で紹介し、価値付けを行った。特に、「からあげ屋」「写真館」「肉店」「八百屋」等の店主の方に着目できていた児童は、「からあげ屋さんとはとても優しかったよ」「八百屋のおばちゃんは50年も続けているそうだよ」「お肉屋さんにはたくさん賞状があったよ」「カメラ屋さんには1万枚以上写真を撮ってきたらしいよ」等の気付きを得ることができていた。児童と共有をしていく中で、「お肉やさん、すごい!」「からあげ屋さん達人じゃん!」等の発言が聞かれるようになってきた。

そこで、「どうして、すごいと思うの?」と聞き返したところ、「だって、賞状をもらえるなんてプロだよ」「こんなに親切に教えてくれるから」「50年間3人でお店を支えているから」「頑張っているから」等の発言を引き出すことができた。「学校の周りには、『すごか人』がたくさんいるんだね。よく見付けることができたね」と称賛することで、「また、『すごか人』に会いに行きたい」という意欲付けを行うことができた。

また、児童が自分たちの生活との関わりで、地域の人々を捉えている姿にも価値づけを行っていくことも大切にしていた。「給食用のお肉も届けてくれるんだって」「この間、からあげ弁当を買って食べたよ」等、直接的間接的な関わりを大切に取り上げることで、児童はより地域の人々を自分事として捉え、自ら働きかけようとするようになっていった。



こんなにたくさんの野菜のことをおぼえているおばちゃんてすごい!



いつもやさしく話をしてくれるおじちゃんてすてきだね!



朝早くからここでじゅんびをしているんだね…

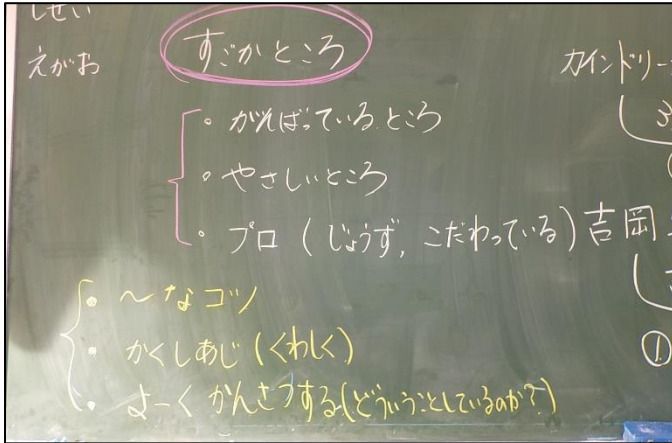


この大きなお肉も学校にもってきかせているのかな?

単元の指導の実際②

イ「すごか人たんけん」の計画・実施【8, 9, 10 時目】

「すごか人」の「すごかところ」を見付けに行くというまち探検の視点が出来たところでグループでの2回目のまち探検の計画を立てた。計画を立てる上で、もう一度クラスで「すごかところ」とは何なのか共有した(下図参照)。以下に示しているものが「すごさ」と捉えている視点である。



その視点を基として、聞きたいこと、調べたいことをグループで話し合わせた。「こだわり」「大変なこと」「うれしいこと」等の思いや願いに迫ることができそうな質問を考えているグループを取り上げて、クラスで共有する時間をつくった。そのように視点で質問を考えられる児童はそう多くはなかった。教師が質問内容にも価値付けをすることで、児童によって視点を得るようになったのである。その視点の質をさらに高めさせていくのである。

その後のまち探検では、積極的な児童の姿が見られた。Tシャツを作成しているお店に行った児童は、「できれば中を見せていただけませんか?」とお店の方をお願いしたのである。児童にとって、その店は2回目の訪問であった。お店の方も予期していなかったような様子であったが、快く作業場を見せていただいた。そして、外から見ているとパソコン作業が多そうなイメージがあったが、予想以上に手作業が多いことに児童も感銘を受けているようであった。気になる機械のことを次々に質問し、お店の方も感心されていた。教師も補佐的に作業されている姿や説明されている姿に「すごいね」「たいへんだね」と価値付けや意味付けを行うことで児童の記憶

に残っていくようにした。最後に「こだわりは何ですか?」と児童が問うたところ、「こだわりがないところがこだわり。お客さんに合わせる事が大切だと思っている。」という言葉で児童の目がお店の方に更に釘付けになった。まさに、思いや願いに迫った瞬間である。お店の方から聞いたことについて、「かっこいいね」「すごいことを聞いたね」と更に価値付けを行うことで、実感を伴った学びを得ることができた。



単元の指導の実際③

ウ「すごか人たんけん」の振り返りから活動の見通しをもたせるまで【11, 12 時目】

「すごか人たんけん」の振り返りでは、クラス全体で共有することはせず、自由に動きながら友達と共有するような形をとった。ただし、同じお店の人と関わった児童同士が交流できるように場を設定した。児童らは、適宜新たな気付きが見見付かるとカードに記入し、カードを増やしていった。カードが増えていくこと自体に達成感を感じ、学びが蓄積していることを実感しているようであった。ここでは、あえて見付けたことをクラス全体で共有することをしていない。「自分だけが見付けた『すごかところ』」「自分が見付けた『あの人のこだわり』」というような特別な思いに浸らせるためである。このことが、後の伝えたいという原動力になっていくのである。

クラスの中で「地域にはこんなにすごい人たちがいる」という充足感が漂う中、ある児童のつぶやきから次への活動の方向性が決まっていた。「こんなにすごいのに何でお客さんはそんなにいないんだろう？」このつぶやきに続いて「もったいない！」「みんな知らないんじゃない？」「宣伝したい」という発言が続いていった。中にはチラシみたいなものを既に作り出す児童さえいた。「2の1の恩返しだ！」と次の活動への機運は急速に上がっていった。そこで、「伝えることが恩返しになるのかな」と児童に問うたところ、「みんなが買ってくれるようになるよ」「知らないのはもったいないよ」との返答。児童の意欲に押し出されるようにして、次の活動が決まったのである。

まさに、児童の地域や「すごか人」への愛着が膨らみ、どうかしたいという思いが溢れだした瞬間であった。児童の思考の文脈や思いや願いを大切にしながらも、「ひと」という視点を共有し、教師側が意図をもって計画を助言したり、獲得した気付きに対して価値付けを行ったりすることが重要であると考え、実践を重ねている。1つの気付きから学級集団に大きな学びのブームを生み出し、その繰り返しが新たな学びや活動をつくり出していくことは生活科の醍醐味である。

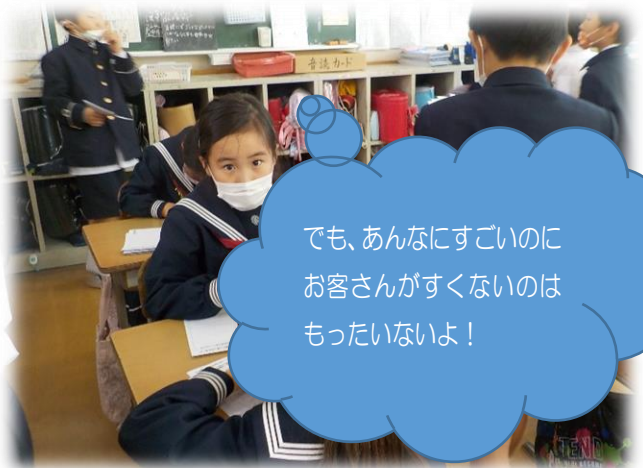
さらに単元終末では、考え、表現するということを繰り返しながら、地域の人々のよさを再確認し、確かな気付きを得たり、関わった人々への思いを更に強くしたりする児童の姿を目指していきたい。



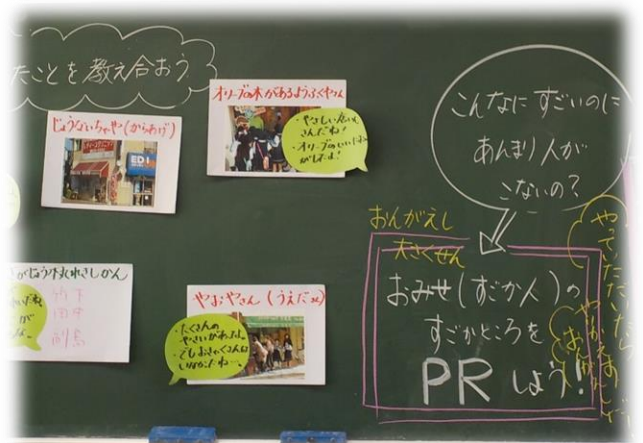
朝早くからやさいを配達なんて大変そうだけど、がんばっているんだね。だから50年も続けているのかな



からあげやさんが何でそこにお店を出しているかまでは知らなかったな



でも、あんなにすごいのにお客さんがすくないのはもったいないよ！



単元の指導の実際④

エ「お話ししようかい」活動による、伝えたい内容や表現方法の更新【13、14 時目】

見つけた地域の人々のよさをどのように伝えるのかを児童と検討した際、保護者へ紹介したいという意見が高まっていった。ただ、コロナ禍という社会情勢から学校に招待することはできない。だから、動画を配信して見てもらおうという方向性が決まった。

その後、児童たちは、伝えたいことを精査しながらどのように伝えるのか試行錯誤を繰り返していった。劇で伝えるグループ、役割を決めてよさを輪番で紹介していくグループ、様々であったが音声だけでは伝わりにくいということがグループの中で交わされるようになっていった。

自分たちだけで活動をしていても客観的に振り返ることは低学年児童にとって難しい面がある。そこで、「お話ししようかい」活動を仕組むことで相手意識をもたせ、伝えたい内容を明確にさせたり、表現方法を再考させたりするための時間を設定した。劇を軸に「すごか人紹介」を考えていたグループには、他のグループから「何を紹介したいのか分からない」という指摘が入った。児童たちなりにどうしたらいいかと考え、途中で言葉を入れてストップモーションのように劇を作り直したいという工夫を導き出したのである。ここで大切にしなければならないことは、何を伝えたいのか明確にさせることである。劇や動きで伝わらなければ、言葉にすることの方がよいということを他のグループでも実践されていたのである。

14 時目の授業では、「①自分たちの伝えたいことを相手に伝え合う」「②感じたことを話し合う」「③よりよい方法を再考する」「④再考したものを試す」という流れで学習を進めている。「④再考したものを試す」ことをクラスの前で披露できたグループは、他のグループからの称賛や教師からの価値付けの言葉により、成就感を味わい、実感を伴った学びをすることができていた。このように、自分たちは何ができるようになったのか、どのように変化したのか、そしてそれは価値があるものなのかを体感させることこそが深い学びを生み出すための必要条件であるのではないだろうか。

以下に児童が授業後に書いた振り返りの記述を記載する。

〈児童 A〉

グループでやり合ったとき、どっちもわからないと言ったのでなんでだろうと思いました。いっぱい話し合っ、すごくいいげきになったので、本番の時のやる気がめちゃくちゃ上がって早くしたいなと思いました。a

〈児童 B〉

もう1回せんでんしたをしたら、うまくいきました。やっぱり声を大きくしたほうがわかりやすいんだなと思いました。わたしたちのせんでんでカインドリーショップやさんが人気になるといいなと思いました。b

〈児童 C〉

げきはかんせいしたけど、もっとパワーアップして、よしみちさんのすごかところを知ってもらいたいです。よしみちさんには、いっぱいすごかところがあります。それをぜんぶ伝えたいなと思いました。c

児童の振り返りの記述からは、活動への意欲が高まり次時への期待が膨らんでいる様子が見られたり（波線部 a）、触れ合ってきた地域の人々への愛着や誇りさえも抱いていることを見取ることができる（波線部 b c）。このように、自分たちが学んできたことを発信したいという思いや願いにそった活動を仕組むことで、児童の気づきが明確なものになり、活動への意欲の高まり、また地域の人々への愛着が醸成されていくこと様子を見ることができた。